

為めに本校の経費より相の金額を支出して之を補足し漸くにして右額を贈與する事を得たる事情に候也即ち貴下の贈與したる額が貴下の勞力に對しまた貴下の品位を保つに不足なりと考へられたるは畢竟するに以上の事實に對する認識を缺き且つ諒解の不充分なるに起因するものと存せられ誠に遺憾とする所に御座候右御了承相成度此段得貴意候

(手書き)

(「外國人教師關係 自大正十三年至十一年」)

(九) レオ・シロタ Leo Sirota

在職期間 昭和六年〜十九年(一九三二〜一九四四)

備外國人教師

担当科目 ピアノ

履歷(要約)

一八八五年五月四日ウクライナのキエフに生まれる。本校に提出された履歷書によると、同地音楽学校・大学卒業後、ペテルブルク官立音楽学校



レオ・シロタ

も卒業、さらにウィーンでF・ブゾーニに師事し、そのかたわらウィーン大学で哲学・音楽史を学んだ。また、師とともに演奏会を催すなどヨーロッパ各地で独奏ピアニストとして活躍。

一九二八年(昭和三年)に初来日し、演奏活動を行った。

一九二九年(昭和四年)再来日。

一九三一年(昭和六年)カガノフ(L・コハンスキー)の後任として東京音楽学校で教鞭をとるようになり、コンクール審査員、新交響楽団ソリストとしても活躍した。門下生に永井進、豊増昇、園田高弘らがいる。

一九三四年(昭和九年)奏任官五等以上に準ぜられる。オーストリア政府よりプロフェッサーの称号を授与される。

一九四一年(昭和十六年)サンフランシスコから日本に戻る帰途、ホノル

ルで抑留され、解放のために日本の外務省が尽力した。

一九四六年(昭和二十一年)五月二十二日アメリカに移住、セント・ルイス音楽院教授となる。

一九六三年(昭和三十八年)門下生に呼ばれて再来日し、日比谷公会堂にて最終公演を行なった。

一九六五年(昭和四十年)二月二十四日⁽¹⁾ニューヨークで歿する。

(1) 没年月日を二十五日と記載している事典もあるが、シロタの長女ベア

テ・シロタ・ゴードン著「一九四五年のクリスマス」では二十四日となつて

いる。

(2) ベアテ・シロタ・ゴードンに確認したところ、同著内の年譜でセント・

ルイス没とあるのは誤りで、ニューヨーク没であることが判明した。

昭和六年一月十五日

備外國人教師備入ニ付上申案

本校ピアノ科担任ノ備外國人教師ヨセフ・カガノフノ備入契約期限ハ來ル三月末日ヲ以テ滿了可致ニ付テハ右後任トシテ奧地利國人レ

オ、シロタヲ備入度ニ付御許可相成度別紙履歴書并備入契約書案相添へ此段及上申候也

追テレオ・シロタハ現ニ東京滞在中ノ者ニ有シニ付御了知相成度

年月日 學校長

文部大臣宛

〔外國人教師關係 自大正十三年至昭和十一年〕

〔手書き〕

〔東京音楽学校へ提出された履歴〕

Ich bin am 4 mai [sic] 1885 in Kiew geboren - zuständig nach Wien (Oesterreich). Mit fünf Jaren erhielt ich meinen ersten klavierunterricht. Das erste Konzert gab ich im Alter von 9 Jahren.

Nach Absolvierung der Kaiserlichen Musikschule und Universität (Jus) in Kiew, ging ich nach Petersburg. Dort erhielt ich das Diplom des Kaiserlichen Konservatoriums. Im Jahre 1907 reiste ich nach Wien um meine Musikstudien beim berühmten Pianisten und Komponisten Ferruccio Busoni zu vollenden. Zur gleichen Zeit studierte ich an der Wiener Universität Philosophie und Musikgeschichte.

Im 1909 konzertierte ich gemeinsam mit Busoni in Wien, und würde nachher für eine grosse Tournee in Europa verpflichtet.

Seit jener Zeit konzertierte ich in Deutschland, England, Frankreich, Spanien, Italien, Russland, Polen, Oesterreich, Schweden und in anderen Straten Europas.

Von 1920-1923 war ich der Leiter einer Klaviermeister-

Klasse in Polen.

Mein ständiger Wohnsitz war Wein IX, Währingerstrasse 58.

Leo Sirota

29 Dezember 1930

P. S.

Die von mir ausgebildeten Schüler, die als Solisten, und Pädagogen wirken, sind folgende:

in Wien, Freundlich (Professor am Wiener Konservatorium)
Ehrlich Schächter
Jascha Harenstein (Generalmusik Director)
Rudnizki (Dirigent)
in Paris, Kohanig
in London, Method Hains
in New York, Kelberin (Prof. Am Konservatorium)
in Buenos Aires, Senac
in Athènes, Spandonides
in Polen, Dr. Günsberg, Kornfeld
in Rumänien, Wechsler
und viele andere

Leo Sirota

〔手書き〕〔外國人教師關係 自大正十三年至昭和十一年〕

昭和十六年十月、シロタ夫妻はサンフランシスコからの帰途にホテルに立ち寄ったところを抑留された。これを解くために交わされた電報と東京音楽学校長から外務省への礼状を掲載する。

外機密 極秘 往電寫

昭和十六年十月廿一日拾六時

在ホノルル 喜多總領事

東郷外務大臣

東京音樂學校教師「レオ、シロタ」抑留の件
第九七號

東京音樂學校ヨリ同校傭教師「レオ、シロタ」(獨逸國籍猶太人)ハ本邦ヘノ歸途其地 2113 Lanulu Place ニ抑留セラレ(本人ノ電報ニハ detain トアル由) 出國許可ナク同校授業ニ支障ヲ來タス趣ヲ以テ大洋丸ニ乗船許可方願出居ル處本件真相ノ如何ニ依リ貴官裁量ニテ適當ニ取計アリタシ

(和文タイプ)

(「本邦雇傭外國人關係 雜件專門學校の部」 外交資料館蔵)

歐亞局長

昭和十六年十月三十日

東京音樂學校長 乘 杉 嘉 壽印

外務省與謝野歐亞局第二課長 殿

拜復 時局緊迫の折柄愈々御精勵之段邦家の爲慶賀に奉存候
陳者當校傭外國人教師レオシロタ抑留の件に關しては特に在ホノル、帝國總領事宛事情調査並電訓等御手配被下候竝々ならぬ御高配に對し深甚なる言意を表明申上候いづれ本人歸朝の上は事情調査の上改めて御挨拶申上げ度今は乍略儀以書中御禮迄如斯に御座候

敬 具

二 伸 先般御電話にて御來示の件に付ては別途適當なる措置

を講じつゝ有之候に付御含置被下度爲念申添候

(和文タイプ) (「本邦雇傭外國人關係 雜件專門學校の部」 外交資料館蔵)

シロタ獨奏會

無人の境をゆく難曲征服

過去數年間東京音樂學校ピアノ科において空前の好成績を擧げ多くの秀才を我樂壇に送り、同科の名を重からしめたレオ・シロタは、教師としての劇務の外、獨奏藝術家としての活動により常に社會に働きかけることを忘れない。

二十三日の夜日本青年館において行つた獨奏會曲目は

古聖詠に據るバハの屬衆用幻想曲と遁走曲を彼の師ブゾーニが近代的洋樂奏法技巧を豊かに盛つて編曲した大作(本邦初演)と、シヨパンのバラッド四曲全部、ドウヴチザークのフモレスケに、スメタナのポルカ、及びストラヴィンスキーのペトルシユカの三樂章を含んでゐた。

此曲目の編成法は全然専門家向きで一般大衆向きではない。

従つて當夜聽衆の過半は熱心なピアノスト又はピアノの學生で初演のバハ、ブゾーニはもちろん、シヨパンの容易に演奏されな
いへ長調、へ短調のバラッド、及びストラヴィンスキーは非常なる緊張を以て聴き、曲目が終り、禮奏二回後も座を立つて歸らうとはしなかつた。

専門家以外の人々もシロタの曲に對する素直な解釋と至難の技巧を征服すること無人の境を行く如き演奏に酔つて引き込まれたやうである。然し中には近づき難い感を抱くものもあつたに違ひない。もう少し大衆に親しみのある曲の量を増すことと、初演の難曲に

對しては簡単な解説を曲目に加へて比較的ピアノ・リテラチャー
になじみの少い人々にも理解に便ならしめられることである。

(牛山)

〔東京朝日新聞〕昭和九年四月二十七日

(十) クラウス・プリングスハイム Klaus Pringsheim

在職期間 昭和六年〜十二年(一九三二〜一九三七)
備外国人教師
担当科目 作曲法、合唱歌、管絃楽

履歴(要約)

一八八三年七月二十四日、フェルダフィング(ミュンヘン郊外)に生まれ
る。
一九〇一〜一九〇五年、ミュンヘン大学で哲学と音楽学を学ぶかたわら、
トウイレに作曲、シュターフェンハーゲンにピアノを師事した。
一九〇六年、マラーが芸術監督をつとめるウィーン宮廷歌劇場の副指揮
者となる。その後、ジュネーヴ、プラハ、プレスラウ、ブレーメンの各



クラウス・プリングスハイム
昭和34年叙勲・勲五等瑞宝章(出
典:『音楽之友』昭和34年9月号)

劇場の音楽監督、指揮者を歴任した。

一九一八年、ベルリンのグロッセ・シャウシュピールハウスの音楽監督
兼専属作曲家としてマックス・ラインハルトに招聘された。

一九三二年九月八日来日、東京音楽学校備外国人教師に着任。¹⁾在任中はマ
ラー、ブルックナー、ヴァーグナーなどの作品を演奏会で多く取り上
げた。また、東京音楽学校からの委嘱で《管絃樂協奏曲、作品三十二》
を作曲、東京音楽学校管絃樂部により初演した。

一九三七年七月三十一日契約期間満了につき退職。秋には暹羅(現在のタ
イ)へ渡った。

一九三九年(昭和十四年)五月、再来日。一九四六年秋にアメリカへ渡
る。

一九五二年(昭和二十六年)九月三日三たび来日。武蔵野音楽大学で教鞭
をとる。

一九七二年(昭和四十七年)十二月七日東京にて没。

(1) 来日のいきさつについては御子息のハンス・E・プリングスハイム氏の話
(本書第八節一に所収)を参照。

プリングスハイムは家族をベルリンに残したまま、単身で赴任してい
た。昭和九年には妻ララ・プリングスハイムが来日し、しばらく日本に滞
在した。以下、家族来航の旅費支給に関する文書、契約書、ララ・プリン
グスハイムからの礼状(原文と訳文)。

音庶祕第一四號 裁決定二月十七日 發送二月十八日

昭和八年二月十七日起案

上申書案

昭和六年九月八日備入契約ヲ締結シタル本校備外国人教師獨逸國人
クラウス・プリングスハイムハ其ノ家族ヲ本國ニ殘留シテ來航致候
處最近國價暴落ノ爲、徒來ノ送金額ヲ以テハ到底ソノ多數ノ子女ヲ